平成 28 年度　第 2 回　浜松市総合教育会議　議事録

開催日時：平成 28 年 10 月 4 日（火）15:00～17:00
傍聴者：6 名　報道関係者：3 名

次第
1　開会
2　市長あいさつ
3　協議事項
　(1)「子どもの放課後の居場所づくり」について（報告）
　(2)「子どもの才能を伸ばす教育」について（意見交換）
　(3) 次回の協議事項について
4　閉会

1　開　会

市長、教育委員会（6 名）全員出席

（事務局：企画調整部次長　松永）

ただいまから、平成 28 年度第 2 回総合教育会議を開催いたします。

会議の開催に先立ちまして、市長から一言ごあいさつをお願いいたします。

2　市長あいさつ

（鈴木市長）

本日は、総合教育会議にご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。前回は放課後の子どもの居場所づくりということで、皆様からご意見を賜りました。まずは、現在の取り組み状況等の報告がありますので、皆様にご確認をいただき、ご意見を賜りたいと思います。

その後、「子どもの才能を伸ばす教育」ということで、意見交換のテーマ設定をさせていただいております。「子どものいろいろな才能をいかに伸ばしていくか」、これは子ども自身の問題でもあると同時に、環境やきっかけづくりを含めた導きをすることも我々の大きな役割だと思います。非常に大きなテーマではございますけれども、皆様の忌憚のないご意見をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

（事務局：企画調整部次長　松永）

それでは、本日の議題に移ります。ここからの進行は花井教育長にお願いをいたします。

3　協議事項

(1)「子どもの放課後の居場所づくり」について（報告）

（花井教育長）

それでは、次第に沿って議事を進めてまいります。

まず、次第の 3 の(1)「子どもの放課後の居場所づくり」（報告）について、事務局から説明をお願いします。

（事務局：学校教育部次長　金島）

資料 1 をご覧ください。放課後児童会における大学生ボランティアの活用について、取り組み状況をご報告いたします。1 の第 1 回の協議事項「放課後の居場所づくり」での主なご意見ですが、放課後児童会のスペースの確保等のハード整備、子どもの居場所と高齢者の居場所の一体的整備、放課後児童会の学習とそれ以外の活動の場を分ける仕組みづくり、放課後児童会の支援員の育成、教員 OB や退職者、大学生のボランティア活用のモデル試行、有償ボランティア制度の導入の検討等がございました。

そして 2 の取り組みの概要ですが、上記のうち、「大学生のボランティア活用のモデル試行」及び「有償ボランティア制度の導入」を検討するため、浜松市と包括連携協定を締結し、「地域が支える子育て支援に関すること」で、学生の社会参画に取り組む浜松学院大学から課題等を聴取いたしました。

その中で、3 の大学生ボランティアの意義として、教育に関わる体験による人材育成、放課後児童会でのダイナミックな活動の協力者、「お兄さん」「お姉さん」との異世代交流、運営スタッフの人材確保が指摘されました。

また、4 の課題及び実施手法案については、大学授業との時間調整、これは平日の放課後児童会の開設時間と大学の授業時間が重なる可能性が大きいため、参加の障壁となるというものです。実施手法案として、まずは夏休みに大学生ボランティアの活用を試行的に実施することを検討してまいります。次に、放課後児童会における大学生ボランティアへの有償ボランティア制度の導入ですが、これは継続的に責任感を持って参加できる仕組みとして、有償ボランティア制度の導入を検討するものです。労働に対する対価としての報酬を支給すること、活動場所までの交通費を支給すること等を検討してまいります。

5 の今後の調整として、受け入れ態勢の調査を主任支援員研修で実施したいと考えております。さらに各大学との連携を視野に、今後、浜松市学生ボランティアネットワーク（通称「学ボラネット」）とも調整をしてまいります。

（花井教育長）

ただいま第 1 回目の総合教育会議の協議を経て、子どもの放課後の居場所づくりにおける大学生ボランティアの活用についての報告がございました。この点につきまして、ご質問、ご意見がありましたらお願いいたします。

（渥美委員）

先輩が後輩の面倒を見るということは非常に崇高なことですが、人間は何がしかのお金

をもらうと責任を感じ、時間をかけて良いものを作り始めるところがあります。ボランティアというのは、善意でやっているという意識がどこかにあって、どうしても余った時間の中でやるという意識が出てきてしまいます。

かといって高額な報酬を払うのも難しい部分がありますので、そういった観点からも有償ボランティア制度を運用していただくとありがたいと思います。

（鈴木委員）

資料の 4 の(1)の「大学授業との時間調整」で、浜松学院大学が授業の一環としてボランティア活動を実施しているという記載がありますが、例えば、授業の一環ではなく、学科の通年のカリキュラムの中に組み込むことが期待できるのか、お伺いしたいと思います。

（事務局：学校教育部次長　金島）

カリキュラムの中でボランティア実習を取り入れているということですので、放課後児童会についてもカリキュラムの一環として展開していくことについては、ご検討いただく余地はあるのではないかと考えています。

（鈴木委員）

実施時期の予定はありますか。

（事務局：学校教育部次長　金島）

来年度から一部実施をしていけるように考えております。

（鈴木市長）

当初予算に盛り込むのでしょうか。

（事務局：学校教育部次長　金島）

はい。そのようにしていきたいと考えております。

（鈴木市長）

学生だけでなく、退職者のボランティアへのアプローチはありませんか。

（事務局：学校教育部次長　金島）

まずは大学生というところで取り組んでおりますが、今後、退職者等についても検討していきたいと考えております。

（鈴木市長）

浜松は大学が少ないため、学生数も少ないですが、立派な企業がたくさんありますので、教員免許を取ったけれども教職には就かずにサラリーマンとして働いていて、退職後は子どもを教えてみたいと考えている方がいらっしゃるのではないでしょうか。

（安田委員）

浜松市の校長会では、退職した方たちの会があり、会員の方には現場を支援したいという思いがあるそうです。最近その会の方から聞いた話では、小学校からボランティアとして放課後の子どもの勉強の面倒を見てほしいという要請があり、そこの学区に住んでいる退職をした教員 OB が放課後の教室で子どもたちに勉強を教えているそうです。そういった学校との連携がもう少し広がっていけば、何らかの動きが期待できるのではないかと思い

ます。

（鈴木市長）

もちろん教員 OB も対象になりますが、民間企業を退職された方の中にも教員免許をお持ちの方が一定数いらっしゃるのではないでしょうか。

（石田委員）

教員免許が無い方でも、放課後児童会等で子どもたちに勉強や遊びを教えたいという夢を持っている方がいらっしゃるのではないかと思います。

（鈴木市長）

大学生は授業等で時間の制約もありますし、退職して自由になる時間があって、教員免許は無くても子どもの教育に関わりたいと思っていらっしゃる方の潜在的ニーズを掘り起こすというのも手ではないかと思います。

（石田委員）

人づくりネットワークセンター等で広報し、輪を広げて仲間を探すことができれば、すばらしいと思います。

（鈴木市長）

そういった気持ちがあっても、何をしたら良いのか分からない、活動場所がどこにあるのか分からないといったこともあると思いますので、市で広く募集して、活躍の場を提供することができるようになれば良いと思います。

（石田委員）

漠然とした人材バンクだと登録しにくいこともありますので、こういうところにこういった人材が欲しいと明確にして募集すれば、集まりやすいのではないかと思います。

（鈴木市長）

「広報はままつ」やホームページ等のツールで、「子どもたちの学習支援をしてくれる、そんな志のある退職者はいませんか」といった募集をすれば、結構集まるのではないかと思います。

（石田委員）

すでに常葉大学と浜松学院大学の学生がボランティアで学習支援をしているという情報を聞いたことがあります。

（事務局：学校教育部次長　金島）

浜松学院大学は、広沢小学校で学習支援ボランティアをしています。

（事務局：企画調整部次長　松永）

常葉大学浜松キャンパスのボランティアサークルに所属する学生が、萩丘小学校で学習支援ボランティアをしていると聞いております。

（鈴木市長）

学ボラネットとは、どのような調整をしていますか。

（事務局：学校教育部次長　金島）

こちらの趣旨をご説明し、先方で少し検討をさせていただきたいということで調整を進めています。

（太田委員）

静岡大学の工学部や情報学部では、ボランティア活動は行われていますか。

（事務局：学校教育部次長　金島）

静岡大学では、地域連携室を通してボランティア活動が行われているそうですので、そちらとも調整できればと思っています。

（太田委員）

支援員の年齢が比較的高く、ダイナミックな活動をするには大変な方も多いので、夏休みに学生ボランティアに来ていただければ、川で遊んだり体を使って遊んだりする機会が増えるのではないでしょうか。学生ボランティアが浜松で広がっていけば良いと思います。

（鈴木市長）

遠方の大学等に通っている学生は、長期の休みの時、どのように過ごしているのでしょうか。

（太田委員）

浜松の大学の学生だけではなく、市内に帰省中の学生が夏休みの間だけ活動するというのも良いと思います。

（石田委員）

特に教員を目指している学生にとっては良い機会になると思います。

（鈴木市長）

夏休みと春休みに募集できそうですね。

（太田委員）

支援員の方は体を使って一日子どもたちと関わって遊んでいるので、若いパワーがあればすごく助かるのではないかと思います。

（渥美委員）

長期休暇にアルバイトに励む学生も多いかと思います。東京でアルバイトをする場合、生活費がかかりますが、地元に帰って来れば、その分は浮かすことができます。ボランティアの報酬が多少安くても、ある程度経済的にも埋めてあげられるという部分があるのではないかと感じます。

学生ボランティアという点が挙げられておりますけれども、人生勉強で学んだことは、定年退職した人たちこそが非常によく分かっていらっしゃり、難しいことを易しく説明できるのではないかと思います。

企業に勤め上げた人や人生勉強を積んだ方が、例えば夏休み等に学校の授業とは違う観点からいろいろな指導をしてくださるということは、子どもたちが社会に出た時の人間としての幅を広げてくださるチャンスになろうかと思います。ぜひとも学生ボランティアだ

けではなくて、幅広い人材という観点から、そういった方々に従事していただきたいと希望いたします。

（鈴木市長）

安田委員が言われたように、教員 OB も重要な戦力ですね。

（安田委員）

市内の企業には、OB 会のような窓口はあるのでしょうか。そういったところに働き掛けることもできるかと思います。

（花井教育長）

産業部等の企業と関連があるところから、窓口になりそうなところを探すこともできるかと思います。

（安田委員）

そういったところで、第二の人生の生きがいを見つけませんかといった感じで声を掛けてみるのも良いのではないでしょうか。

（鈴木市長）

市から発信すれば、結構リアクションがあるのではないかと思います。やってみる価値はありますね。

(2)「子どもの才能を伸ばす教育」について（意見交換）

（花井教育長）

それでは、協議事項の(2)「子どもの才能を伸ばす教育」についてに移ります。意見交換に入る前に、まず事務局から資料について説明をお願いします。

（事務局：企画調整部次長　松永）

資料 2 をご覧ください。協議事項「子どもの才能を伸ばす教育」では、論点、協議のポイント、国の方針、次に本市の取り組み、最後に他都市の取り組みという流れでご説明をさせていただきます。

まず論点としまして、「子どもの才能を伸ばす取り組みをどのように推進していくか」というところで進めて行きたいと考えております。協議のポイントでございますが、子どもの才能を伸ばす教育の機会の提供と場所の提供のそれぞれに関連する項目としまして、企業を始めとした地域との連携、様々な分野の専門家や指導者の方との連携も必要になります。また、子どもたちへの働き掛けに対しての工夫や体験の充実、子どもの興味･関心に応じたサポートの充実も協議のポイントになろうかと思っております。

国の方針につきまして、日本の将来を担う子どもたちの教育の再生は、国の最重要課題として挙げられております。平成 25 年の 1 月に発足した教育再生実行会議では、今年の 5 月 20 日に、「全ての子どもたちの能力を伸ばし可能性を開花させる教育へ」ということで、第 9 次の提言が発表されました。

提言の中身をご紹介させていただきますが、「多様な個性や能力のある子どもたちが、こ

れまで十分に伸ばせていなかった能力を開花させ、社会の中で活躍できる可能性を広げられるよう、これまで以上に学校が地域や社会と連携しながら、これまでよりも包容力を高め、懐深い教育を展開していくことや、ICT 等を活用して一人ひとりの特性に応じた適切な配慮や支援を充実し、世界で最も進んだ教育を実現していくことが必要」だと触れられております。その下に主な施策として、よりきめ細かい習熟度別少人数指導等の推進から、小学校高学年での教科担任制の推進等の施策も示されております。

まさに今回テーマとしました子どもの才能を伸ばす教育と共通することが非常に多く、国と合致する進め方をしている状況でございます。

続きまして 2 ページ、3 ページ、本市の取り組みでございますけれども、こちらにつきましては、学校の取り組みと、学校から離れた校外学習や、土曜日、日曜日に子どもの可能性を引き出す取り組みの 2 つに分けてご説明をさせていただきたいと思います。それでは、学校の取り組みの説明からお願いいたします。

（指導課長）

資料 2 ページ、本市の取り組み、これからの社会を生き抜くための資質や能力を育む施策につきまして、説明させていただきます。

始めに第 3 次浜松市教育総合計画において、目指す子どもの姿の 1 つに、「これからの社会を生き抜くための資質や能力を育む子ども」が掲げられております。これを受け浜松市立小中学校では、子どもたちが主体的に取り組む学習活動や様々な体験を通して、目指す子どもの姿の具現を目指しております。

「取り組みの状況」です。全部で 8 つ掲げてございます。順を追って説明してまいります。英語教育では、小学校教員の海外研修を実施しております。本年で 3 年目ですが、今年は現地の状況により残念ながら中止となりました。また、指導力向上のための小中学校対象の研修を実施しております。

情報教育につきましては、本年度から市内の 3 小学校においてタブレット端末による学習応援システムの実証研究を行っています。また、学校の情報化推進計画の策定や情報機器の導入等を行っております。

理数教育では、全小学校への理科支援員の配置を完了しております。これにつきましては、5、6 年生の学級数×60 時間が基本配置時数ですが、全ての小学校で活用されています。また、市役所の関係各課や静岡大学工学部等と連携して浜松版理科カリキュラムを作成し、実施をしております。

心の教育では、はままつマナーの作成、配布をしております。次に、学力調査の実施ですが、3 学年を対象に実施をしております。音楽教育では、アクトホールや浜北文化センター等、音響設備の整ったホールで実施しております。図工･技術に関しましては、「浜松市子どもの市展」や地下道ギャラリーで多くの児童生徒の作品を展示しています。

文化･スポーツにつきましては、毎年 8 月に行われております、小学校における 30 分間回泳を昭和 41 年から実施しており、今年で 50 回を超える歴史のある取り組みとなってお

ります。また、文化･スポーツ活動における東海大会や全国大会等の参加への激励金や文化･スポーツ賞の授与を行っております。

「主な成果」に移ります。理科好きな子どもが多いことが、全国学力･学習状況調査でも明らかになっております。また、世界規模の大会が行われる会場、アクトの大ホールやトビオ等での体験が、子どもの夢や希望を広げる機会となっております。

「課題」としましては、教員の資質や能力を向上させることや、家庭や地域、企業、大学との連携を進めることが挙げられます。

「今後の方向性」でございます。人づくりネットワークセンターを活用した市民総がかり教育の推進や、将来、自分らしさを発揮しながら、浜松を支え、活躍する人材となることを目的としたキャリア教育の実践等が、今後考えるべき方向でございます。

（生涯学習課長）

引き続き、当課で取り組んでおります、一人ひとりの可能性を引き出し伸ばす施策についてご説明させていただきます。資料の 3 ページをお願いします。

まず、「取り組みの状況」でございます。子どもの才能を伸ばす課外講座開催事業といたしまして、産学官の連携により 3 つの課外講座を実施し、将来の浜松市の地域社会を担う“ものづくり人材”を育成しております。

1 つ目としまして、「浜松 IT キッズプロジェクト」でございます。これは市販の教材等を利用しましたロボットの組み立てと、それを動かすためのロボット制御プログラミング、プログラミングに必要な算数･理科･英語の習得等体験型･実践型の講座を開催し、WRO（「World Robot Olympiad」：世界ロボットオリンピック）という世界大会がございますが、こちらの出場を目標として取り組んでおります。対象は小学校 3 年生から 6 年生となっております。

2 つ目でございます。「浜松ダヴィンチキッズプロジェクト」でございます。こちらは未来の理系人材の育成のため、基礎知識の習得や研究指導等を複数年度にわたり行う「サイエンスダヴィンチキッズ」、ものづくりの創意工夫への思考能力の育成を図ることを目的とした「ものづくりダヴィンチキッズ」を開催しております。こちらにつきましては、小学校 5～6 年生、中学生を対象としております。

3 つ目は、「浜松トップガン教育システム」でございます。一人ひとりの才能を伸ばす教育システムの確立に向け、算数ゲーム大会「MATH やらまいか」や、学校関係者、保護者等を対象とした「教育シンポジウム」等を開催しております。

トップガンは小学生、中学生を対象としておりますが、今回、初めての取り組みとして、特別に高校生も交え、10 月 23 日に財務省の職員をお迎えし、静岡大学附属中学、浜松北高、浜松市立高校から選抜された生徒さんと、「日本の科学技術予算を考える」をテーマに討論会を行う予定でございます。こうした試みにより物事を複数の視点で捉え、総合的に判断できる力を育成する契機としてまいります。

次に、その他の事業といたしまして、芸術文化人材育成事業として、アクトシティ浜松

において、ジュニアオーケストラ浜松、ジュニアクワイア浜松により、将来の音楽文化を担う人材の育成を行っております。また、浜松科学館におきましては、様々な科学講座の実施のほかにも、小学校 3 年生から 6 年生を対象に浜松サイエンスアドベンチャー講座を開講し、年間を通じて最先端技術の企業見学や自然観察等体験型の講座を行っております。

また、子どもの可能性の裾野を広げていくために、協働センターや生涯学習施設 51 施設で、小中学生を対象とした生涯学習講座や体験学習を行っております。昨年度の子ども講座は 329 回開催し、13,328 人の小中学生が参加しております。

「主な成果」といたしまして、昨年度、東京で開催されました WRO（世界ロボットオリンピック）の日本の決勝大会におきまして、小学生のエキスパート部門で、浜松市から参加したチームが見事優勝をしております。全国の地区予選が 32 会場、そして参加チームは全部門で 1,300 チームに及ぶ大規模な大会であり、世界大会にもつながる大会でございます。

また、国内外の理数系コンテストで数々の受賞も得ております。特に平成 26 年には、インドネシアで開催されました国際生物学オリンピックに、日本代表として浜松市出身の高校生が参加し、見事金メダルを獲得しております。この高校生は実は小学校時代に、先ほど 2 つ目でお知らせしました「浜松ダヴィンチキッズプロジェクト」の「サイエンスダヴィンチキッズ」に参加し、基礎的な研究指導を受けており、育成の成果が現れた事例とも言えるかと思います。

「課題」としましては、小学生から中学生、高校生、大学生に加え、産業人までを視野に入れた、地域のものづくり人材の育成につながるような長期的かつ継続的な教育システムの構築を、浜松版としてつくっていけることができればとも思っております。

「今後の方向性」につきましては、現状では受講生のその後の進路までは、全て把握できているわけではございませんが、今後はこれらのプロジェクトに参加した子どもの進路を把握していくことで、産学官が一体となり地域産業を担う人材の育成を推進してまいりたいと思います。

（事務局：企画調整部次長　松永）

最後に他都市の取り組みとしまして、ICT を活用した取り組みを 2 つご紹介したいと思います。

1 つは静岡県の藤枝市で、地域教育「藤枝オンリーワン教育」による定住促進の一環としまして、今年の 6 月にソフトバンクと包括連携協定を締結し、中学校で人型ロボット「Pepper」を題材にしたプログラミングの体験学習等が実施されてまいります。「Pepper」は、身長が 121 センチで体重が 29 キロの人型ロボットで、銀行や家電量販店、ショッピングモールの店頭等で活用され、伊勢志摩サミットの国際メディアセンターにも配置されたものでございます。具体的に「Pepper」をどう使うかということになりますが、今年度を目途に公立中学校で「Pepper」を使ったプログラミングの初歩を学ぶ授業を始める予定だと伺っております。

次に、茨城県の古河市の「教育 ICT を活用した未来の教育づくり」でございます。昨年

の 5 月に NTT ドコモと協定を締結し、共同研究をスタートしてございます。内容的にはモバイル通信を活用した教育 ICT による新たな学びへの取り組みと、学力向上を目的とした共同研究に関する協定というものになります。昨年の 9 月 1 日から、市内の小中学校 32 校を対象に「iPad」を 1,421 台導入いたしまして、学校内だけではなく校外や自宅でも学習しやすい環境を構築しているということでございます。

学力の向上と教員のスキル向上、児童の安心安全を含めた連絡手段の有用性の検証等も含めて、共同研究を行っていると伺っております。

（花井教育長）

それでは、ただいまの説明につきまして、何か質問がございましたらお願いいたします。

（鈴木市長）

資料には記載がありませんが、文部科学省が推進している起業家教育に関連した取り組みはありませんか。

（石田委員）

引佐北部小中学校の特例制度を利用したカリキュラムは、本年度も継続しているのでしょうか。

（指導課長）

現在、起業家に関わる取り組みをしている学校が 4 校ございまして、その 1 つが石田委員からご紹介のあった引佐北部小中学校です。地域学習で「株式（模擬）会社きりやま」を中学生が設立して、シイタケを始めとした地元の食材等を使った物品を企画･販売をする取り組みをしております。

小学校では、双葉小学校、元城小学校の 6 年生が地元の企業等と連携して、商品を作り、販売まで行っています。熊小学校では、今年度から NPO と連携して、新聞等でも紹介がありましたが、この夏には道の駅でカブトムシの販売をしたそうです。子どもたちが実際に企画し、それを実践する中で様々な学びをしていると聞いています。

（花井教育長）

それでは、資料 2 の論点、協議のポイントに沿って進行してまいります。改めて資料 2 をご覧いただきたいと思います。論点の「子どもの才能を伸ばす取り組みをどのように推進するか。」について、本日は国の方針にもありますとおり、「全ての子どもの才能を伸ばすために、どのような教育を展開できるか」について協議をしてまいります。

「才能」と一括りに申し上げましても、その言葉の中には数字では評価できないものや、本人も周囲の大人も気付いていない隠された才能といったようなものも含まれていると思います。子どもたち一人ひとりが自分の才能に気付き、伸ばすことができる様々な機会を設けることが、才能を伸ばす教育を推進する上での、重要な要素になるのではないかと思います。

本日の協議では、そういった機会や場所を、どのように子どもたち一人ひとりに提供し

ていくか、という観点から、ご意見を伺ってまいりたいと思っております。

協議を整理するために、学校の中での活動と学校以外の活動の 2 つに大きく分けてお話をいただければと思っております。まず、子どもの才能をもっと伸ばすために、学校の教育活動の中でどのようにしたらよいか、ご意見、ご提案を賜りたいと思います。

（安田委員）

先ほどの引佐北部小中学校の取り組みは、1 人の教員の発案からスタートして定着をしていると私は捉えています。双葉、元城、熊小学校についても、1 つの提案が引き継がれ、定着をしてきており、そういった最初の種が浜松市内のいろいろなところでまかれてくると、隠された才能を見出すことができるのではないかと思います。

学校ぐるみの取り組みではありませんが、私が知っている木工が得意な技術科教員は、天竜の木工の方たちや地元の方たちと連携しながら、子どもたちに授業の中で木工作品を作らせ、それを販売しています。地元の方に買ってもらい、地元の方との、こういう商品が欲しいというやり取りを通して、次年度の商品づくりに活かす取り組みをしています。その教員が異動した先の学校でも、また新たにそういったことを始めていると聞いています。

こういった場面で、教員の指導力が発揮されると思います。私は（県教育委員会に許可を受けた上で）免許外教科担当として、家庭科の授業と数学の授業を担当したことがあります。私なりに一生懸命やりましたが、やはり専門外であり、無理がありました。これは私の勝手な印象ですが、市内の中学校では、（国の教員定数によりやむを得ない状況で）家庭科、技術、数学は専門ではない教員から教えてもらっている子どもが結構いると思います。私の知っている学校では、家庭科の教員免許の無い教員が（県教育委員会に許可を受けた上で）免許外教科担当として少しずつ負担をして授業をしておりますので、きちんとした調理実習もできないとまでは言いませんが、十分ではない部分がある一方、家庭科専門の教員がいる学校では、浜松餃子を一から作ってみるといった活動をしています。この専門の教員の有無で生じる差を埋めることができれば、全ての子どもにいろいろなチャンスを与えることができるのではないかと考えることがあります。

（鈴木市長）

安田委員はどのようにしたら今の状況が改善できると考えていますか。

（安田委員）

平成 29 年から教職員の定数が市で決められるようになります。理想を言えば、中学校の技術･家庭科ですと、3 学年で 10 学級ほどの学校規模では、一校に一人の専門の教員の配置が難しくなります。技術･家庭科の教員免許を持っている方が授業の時だけ来てくれても良いし、浜松市に潤沢な予算があれば、定数を定めず、該当教科の教員免許状を持たない教員が授業するケースを一切作らないということも考えられるかと思います。

天竜区のある中学が統廃合で廃校となる際の保護者の言葉で忘れられないのは、「5 教科（国社数理英）の専門の先生から教えてもらえない。ここまで先生が削られるならば、統

合に踏み切るしかない。」という言葉です。この話を聞いた時に、子どもも親も、専門の教育を受けてきた専門の教員に教えてもらえば、基本的なことを教えてもらえ、更には芽が出る、才能が出ると思っているのかなと思うと、浜松市で免外（他の教科の教員が県教育委員会に免許外教科担任を申請し許可を受けて授業を行うこと）を無くすことができればすばらしいと思います。

他には、浜松だけの問題ではないですが、教員を目指す学生で複数教科の免許状を取る学生が増えることが望ましいと思います。

（鈴木市長）

現在の教員採用選考試験では、複数の教科の免許状を持つ受験者の評価を加点していますよね。

（花井教育長）

はい、加点をしています。安田委員からお話があったように、特に技術･家庭科は専門の教員が少ないので、きちんと成績が取れた方の採用ということもありますが、関東、関西の方にも積極的に受験していただくということがありますし、現職の教員に、もう 1 つの教科を取っていただくインセンティブを加えることも検討しています。

免外を全て無くすということはなかなか厳しい状況ですが、正規ではないにしても、講師や支援員として、免許のある人をなるべく確保していくというところは、これからも取り組んでいく必要があると思っています。

（鈴木市長）

全小学校へ理科支援員が配置されたように、技術･家庭科でも同様の対応ができないのでしょうか。

（花井教育長）

検討を進めておりますが、来年度の権限委譲を機に定数が増えるわけではありませんので、適切な資質も考えながら進めていくことになろうかと思います。

（鈴木市長）

ものづくりのプロが浜松にはたくさんいらっしゃいますので、技術科の教員免許を持っていなくても、適切な人材がいそうな気がいたします。

（花井教育長）

まずは教員免許を前提として、なおかつ指導力があるという、両方を兼ね備えている方に教育を受けるというのは重要なことでございますので、少しでも改善が図られるように取り組んでまいります。

（太田委員）

結局、教員の指導力ということになりますが、学校での教員のたった一言、例えば「きみは字がうまいね」、「あなたは声がきれいだね」、その一言で子どもが自信を持って、そこから伸びるという瞬間がある気がしています。そのためにも、教員が子どもたち一人ひとりをきちんと見られる環境づくりが必要ではないかと思います。

（石田委員）

子どもの才能を見つけ出したり伸ばすには、家庭の力も大きいと思います。親に理解や関心があることで伸びていくことも多いですが、今は経済状況の厳しい家庭や障がいを持った子どもが増えています。平等に教育が受けられる場としての学校の力は大きいですが、今の教員は多忙ですので、もう少し余裕を持って子どもたちを日々見られると、いろいろな声掛けもできていくのではないかと思います。

（鈴木市長）

教員の多忙化という部分では、昔と今とどのように状況が変わってきているのでしょうか。

（石田委員）

学校によっても違うと思いますが、保護者との対応に時間がとられるようになりました。

（鈴木市長）

同じような書類を何回も作ったり、余分な研修を受けたりすることも増えているのでしょうか。

（安田委員）

そういったこともありますし、中学校では部活動の負担も大きいと思います。授業のための教材研究をしたくても、部活が終わって下校指導をして、7 時ぐらいからようやく机に向かうことができるというスケジュールになっています。

部活動は、昔でしたら練習の様子を時折確認するだけで済んでいたものが、今は練習の場に付き添わなければなりません。そこに時間が割かれる部分があると思います。

（石田委員）

部活の指導によって子どもの才能が伸びていく部分もありますので、非常に難しいですね。

（安田委員）

部活動が好きで生きがいのように一生懸命取り組む教員がいる一方で、負担で苦しく感じている教員もいます。

（鈴木市長）

ばりばり働いていても多忙だと感じない人もいますし、多忙感というものは人によって違いますので、難しいですね。

（花井教育長）

教員の多忙化を考える上で、多忙と多忙感が違うということを認識しておく必要があるのではないでしょうか。本当に好きで、子どものためにやっていることを多忙だとは感じないということもあるかと思います。

（鈴木市長）

忙しすぎて大丈夫かと周囲が心配するくらいの人でも、全然多忙感が無い人もいますし、本人は忙しいと言っていても、どこが忙しいのだろうと思うような人もいますし、個人の

感じ方の違いの部分もあるかと思います。

（石田委員）

市長が小学校時代に教わった国語の先生は、毎日長文の日記を書くという宿題を出して、そういった中から立派な政治家と作家が生まれたのですよね。教員のちょっとしたアイデアで、子どもの才能を引き出すことができるのではないかと思います。

（鈴木市長）

今でも教員が独自の宿題を出すことはできるのでしょうか。

（指導課長）

基本的には学年で揃えていますが、小中学校の自主学習という取り組みの中で、教員の個性を活かして、例えば新聞を読んで気になる記事について感想を書いてくるという宿題を出す方もいるようです。

（花井教育長）

市長の小学校時代の先生は、市長が書いた日記に対してコメントを書いてくれたり、直接言葉で評価をしてくれたり、モチベーションが高まるような働き掛けはあったのでしょうか。

（鈴木市長）

先生は、概ね目を通されていたと思います。

（花井教育長）

先生はそれが生きがいであり、楽しみだったのでしょうね。

（鈴木市長）

先生は天気が良いと授業を中断してソフトボールを始めたりすることもありましたが、こういったことは、今でもできるのでしょうか。

（花井教育長）

今は一年間のカリキュラムが組まれていて、授業時間数が限られていますので、難しいこともあろうかと思います。

（指導課長）

感想的に申し上げますと、私も担任を持っている時に、浜松は雪がめったに降らないので、雪が降った時には授業を中断して、外に出て季節を感じるといったことをしたことがあります。限られた時間ですけれども、そういった取り組みをする場合もございます。

（鈴木市長）

全ての教員がそのような取り組みをすることは難しいと思いますが、ある程度個人で裁量できる部分があれば、自由にできると良いですね。

（渥美委員）

私は教育委員になって 2 年半になりますが、教員の多忙感ということをよく聞いております。ところが、何が原因で多忙感があるのかということがよく分かりません。多忙感は人によって感じ方が違うでしょうから、何が多忙なのかということがきちんと分からない

と、十把一絡げにして教員は忙しいと言っても、何の解決にもつながらないと感じています。

他者から見て多忙を極める人でも、本人は不満に感じていないこともあります。教員が忙しいと感じるのは、日々の夢や目指すものがないからなのか、嫌で仕方がないことをやらされているからだろうかと考えてしまいます。忙しさを具体的に挙げてみると、人によって対策が違ってくるかもしれません。

例えば、文部科学省は主体的に自分の頭で考えるアクティブ･ラーニングという教育方針を打ち立てました。今までの日本の教育は、一方的に黒板の前で説明し生徒が黒板の字を書き写すような受け身の教育でした。生徒に自分の頭で考えさせるには、教員自身が相当の興味を持って、十分な知識の中で生徒を導いていく必要があります。教員にこのような指導力がなければ、これを全部覚えなさいといった指導のほうが、はるかに効果が上がる結果にもなりかねません。どのように教えたいのか、そのためにどのような力を身に付けなければならないのか、教員が自ら主体的に考えなければ、いつまでも同じことの繰り返しになるのだろうと思います。

例えば、教員と話をしていて、良くも悪くも、もう少し世間を勉強したほうが良いのではないかと感じることがあります。世間を勉強する唯一の方法は、本です。人間は忙しいから食事をとらないといったことはなく、どんな時でも食事をします。教員にとって本を読むことは食事をとることと同じだと思います。どんなに忙しくても本を読まなければ自分の身になっていきませんし、それが自分の力を身に付けていくことだと思います。

自分の専門分野の本だけではなく、あらゆる分野の本から得た知識を身に付けて、それらを全部動員して生徒に向かう時に、教育で子どもの能力を創造することができます。伸ばしていく前に、自分で発見し、創り上げるだけの力を身に付けなければ、アクティブ･ラーニングの成果は出ないのではないでしょうか。

先ほど太田委員が言われた教員の能力という点の観点から申せば、教員にも工夫をしていただきたい部分はあります。一方で、教育委員会や文部科学省から仕事が降ってきて、得意でない部活のことを土日も含めてやらなければならないということであれば、教員が自分の目指す教育を実現できませんので、OB の方や専門家の方が学校に加わって、社会全体として取り組む方法を考えていかなければならないと思います。

（鈴木市長）

教員の個人差が大きい部分がありますので、十把一絡げに論じることはできませんね。

（渥美委員）

中学、高校、大学、社会に出てから、先生と名の付く人たちにたくさん出会いましたが、私の人生の中では小学校の先生が最も印象深く、魂に彫刻を彫られたように、自分の原点になっています。そういった先生が必要だと思います。

（鈴木委員）

子どもの才能を伸ばす教育というテーマについて、私は今の若者気質ということを真っ

先に思いました。講演で聞いたアニメの例え話になりますけれども、私たちより少し上の60 代くらいの世代は、「鉄腕アトム」に代表されるようなヒーローを見て育って、とにかく自分が何とかしなければだめなのだと考えるそうです。その次の私たちより少し下の 40 代くらいの世代は、「ガンダム」のような、僕たちがやるしかないから頑張ろうという考え方をするそうです。今の若者の考え方は、「ワンピース」の主人公の「僕たちでは何もできないかもしれない。できなかったらごめんね、一緒にやってほしい。」という言葉に象徴されるそうです。

今は教職員の世代の二極化が進み、真ん中の世代がいない年齢構成になっているかもしれませんが、少子化で子どもの数が減っているのですから、教職員全体で子どもの様子を見てあげて、気が付いたことを担任に伝える雰囲気が必要だと思います。

情報を共有する中で、先ほど言われた起業家教育のように、自分が担任として見ている時には気が付かなかった子どもの良さに気が付くことが、教員の多忙化という側面も含めて、できるようになれば良いと思います。

また、管理職の方が若い世代の気質を考えて部下を育てているのか疑問に思うこともあります。若者の気概や、何に反応するかということを捉えて若手を育て、その若手が一生懸命子どもたちのために生きて行くということを、少しシステム的にできれば良いのではないかと思います。

市長が言われた起業家教育について、私も会社を経営しておりますので感じていますが、今の若者は自分から一歩踏み出し、ゼロからスタートするということが苦手なのだろうと思います。若い人たちが商工会議所等と連携して新しく事業をスタートさせる取り組みをしていますが、これからの浜松を考えた時に、信号が少し黄色くなっているのかなと思います。若者が一歩引いてしまっている部分、大きな傘の下に入っておけば安心だという考え方が多いところが少し気になるので、子どもの新しい面を拾い出し、種をまくには、教員にもう少し余裕が必要ではないかと思います。

（鈴木市長）

最近、ベンチャー企業の人たちと交流する中で、自分で何か切り開いていこうとする若い人が意外と出てきていると感じています。彼らは割とドライに、会社員として働くよりも自分で起業したほうが良いと考えています。この間話した若者は、将来起業するための第一歩として、ビジネスや経済の動きが分かる証券会社に就職を決めたそうです。しかし、起業したいと考える若者は全体の 10 割ではありません。1 割かもしれないけれども、その1 割を 2 割、3 割にしたいと考えています。

（鈴木委員）

ここ 10 年ぐらい、今までは考えられなかったような異分野のコラボレーションによって、新しいものができていますし、浜松ホトニクスの光産業創成大学院大学のように、企業の中で起業をする人も出てきていますので、起業する方が増えていく余地があるのではないかと思います。

（鈴木市長）

最近の起業には、天才的な頭脳で開発した革新的な技術を基に起業するパターンと、誰でも気が付けば実現できてしまうようなビジネスモデルと IT の技術を組み合わせ、新しいビジネスを創り出して起業するパターンの 2 種類があるように思います。後者の起業パターンのスペースマーケットという会社は、公共施設等を企業の研修スペースとして貸し出すビジネスモデルと IT の技術をうまくマッチングさせ、新たな需要を掘り起こし、東京証券取引所マザーズ市場に上場しました。

中学生や高校生でも、IT を使って新しいビジネス考えてみれば、意外と面白いものが出てくるのではないでしょうか。アイデアを少し支えてあげることで、中学生や高校生でも起業できるのではないかと考えています。

（石田委員）

IT 関連の仕事に就くことで、在宅で仕事ができ、仕事と家庭が両立できる可能性が広がり、女性の活躍促進にもつながるのではないかと思います。

（鈴木市長）

ランサーズという会社は、デザインやシステムエンジニア等、在宅でできる仕事に携わる人と企業を IT の技術を使ってマッチングしています。ビジネスモデルとしては単純なものでも、IT を使うと意外と大きなビジネスになる可能性があると思います。

（渥美委員）

そういったものを学校教育でどのように養っていくか、育てていくかということを、制度としての学校教育のあり方として示すために、文部科学省はアクティブ･ラーニングという方針を提唱しているのだと思います。

問題は、学校の現場で市長が言われたような発想を持つ子を育てていくために、教師はどうあるべきかという視点を持って、制度としてきちんと考えていくことこそが重要ではないかと思います。

（鈴木市長）

学校教育の中では難しい部分もあるかと思いますので、学校外の課外講座である IT キッズプロジェクトの中で、現在はロボットを作るコンピュータ技術のハード面を教えていますが、ソフト面で IT を活用する IT キッズを立ち上げることができれば面白いのではないかと考えています。

（渥美委員）

私はまだ学校教育の現場でも、工夫しなければならない部分が多分にあるだろうと思います。上から教えられたものを、そのまま下に流すという時代から、時代のニーズを自分でしっかり感じ取って、自分の頭で教えて、次世代を養う、そこの部分を今度は学校教育でもきちんと考える必要があるのではないかと思います。

（花井教育長）

議論が学校の枠を離れたところに入っておりますので、次に、放課後や休日も含めて、

学校以外でどのような機会や場所を提供することができるかについてのご意見、ご提案をいただきたいと思うのですが、才能が突き抜けている子どもをどのように育成していくかということについて、市長の強い思いも語っていただきながら、委員の皆様と議論を深めていければと思います。

（鈴木市長）

最近は、新しいことにチャレンジしようという若い世代が、かなり出てきています。自分でビジネスを興す若者は全体の 1 割かもしれませんが、それを 2 割ぐらいに増やすためには、義務教育の中だけで対応することは難しいので、特別課外講座の中で基礎的な IT やマーケティングを学びながら新しいビジネスを考えることが、中学生ぐらいからできるのではないかと思います。

私の先輩で、高校生の時に先生に協力してもらって校内でうどん屋を始めたことがきっかけで料理の修行をしてフランス料理のシェフになり、今では飲食事業を展開されている方がいます。高校生の時に実際にビジネスを体験するようなことは、学校ではなかなかできないので、校外の活動で実現できれば面白いと思います。

（石田委員）

ちょうど 1 年前にこの会議で「教育推進大綱」を決めた時に、「やらまいか精神」というチャレンジする精神を大事にしたいということでまとまりましたので、子どもの才能を伸ばす課外講座についても、浜松ならではの特色を出して、広報にも力を入れてほしいと思っています。

開催場所がどうしても中心地になるため、通うことができない等、距離的に参加したくてもできない子もいるので、講座の中で ICT を活用して、少し遠くにいてもできるようなものも、できてくると良いと思います。

（渥美委員）

先ほどの放課後児童会と今のお話を結びつけて考えると、市長が言われた今までの学校教育の中ではできないことが、放課後児童会で実現できるということにもなろうかと思います。企業を定年退職された非常に高度な専門知識を持っている方が、放課後児童会で子どもたちと接する中で、こういう世界があるのか、こんな人になりたいという、ある種の目標を持ってもらうような機会を与えられる場となるのではないかと思います。

いろいろな企業の方が放課後児童会に携わってくれると、今度は学生ボランティアが企業の方と接点を持って、地元の企業に関心を持ち、浜松に戻って来てくれるという機会にもなっていくのではないでしょうか。

そして、どこでそれをやるかということについて、今の浜松の駅前周辺地は閑散とした状況にありますので、放課後児童会や夏休みなどに学校教育以外のいろいろなものを学ぶ機会の場として、市と学校と企業が中心となって、子どもの将来を見つめた教育の場をつくることができれば、中心地に向かって人を集める力になっていくのではないかと思います。今の子どもは、買い物するにも郊外に分散化してしまって、限られた子ども同士の集

まりになっていますので、同じ目標を持った子どもが一つの場所に集まって交流する場が必要なのではないかと思います。

また、IT を利用することで、時間的、空間的な制約を取り払うことはできるかもしれませんが、社会生活を営む中で最も大事なことは、人と人とのコミュニケーションではないでしょうか。

今の教育は知識偏重で、様々な学力を身に付けることができても、主体的に自分の頭で考えることができないという部分があります。それが社会に出た時に、役に立つ人間と役に立たない人間の差になってくるのではないでしょうか。学力や学歴だけが社会の中で評価されているわけではないということに、子どもたちが早く気が付くことができれば、また違う人生、才能が活かされていくのではないかと思います。

（鈴木市長）

ベンチャー企業の社長でも出身大学は様々ですし、例えばシステムエンジニアに専門外の仕事を依頼しても、目的を達成することは難しいかもしれません。それぞれの得意を活かすことができれば良いのではないかと思います。

（鈴木委員）

私は、昨年度、浜松トップガン教育のシンポジウムを聞きに行きました。その時の内容が、これからの浜松のトップガン教育の行方について探るもので、明確な方針や理想が固まっていないのかとショックを受けて帰ってきたことを覚えています。先ほどの説明の中にあったように、今年度、新しい動きが出て来たことは良いことだと思います。また、その時のシンポジウムでは、夏休みの研究の表彰式があり、子どもたちがパワーポイントで発表しましたが、それ以降にその子たちを大学の実験室に呼んで研究の続きをさせてあげる等、次のステップにつなげる受け皿がないということを、講師の方も指摘されていました。

成果というのはまだまだ、これから出て行くもので、追跡調査も必要だと思ってはいますが、子どもたちが目を輝かせて自発的にやっていることに対して、企業と行政が連携して、少し発展させてやる手助けの手法を考える必要があるのではないでしょうか。

（鈴木市長）

具体的には、どういったことが考えられますか。

（鈴木委員）

資料の 3 ページの今後の方向性として、産学官が一体となった地域産業を担う人材育成の推進という記載がありますけれども、具体的な方策の検討を始めると様々な障害が出てくるのではないかと思います。来年の権限移譲に伴い、浜松方式、浜松式の学校の教育ができるようになっていきますので、最終的に浜松の企業に子どもたちが帰ってきてほしいという企業の願いがあるのであれば、どのような教育･受け皿が必要かということについて、産業界と現実的な方策を考えていくべきだと思います。

（鈴木市長）

私が先ほど申し上げたのは、子どもたちが浜松の企業に戻ってくるためにという発想ではなくて、中学生や高校生が自分で何か創り出すというビジネスモデルを考え、実現性があるものを後押ししながら、起業する経験をさせるというものです。企業に受け皿をつくってもらってしまうと、意外と面白いものが出てこないのではないかと思います。子どもが考えたことを実現できるか、ブラッシュアップできるかということについては工夫がいると思いますが、ビジネスを始める力を育むような体験が用意できないかということを申し上げました。

（鈴木委員）

市長が言われたように、受け皿というものが、例えば大学や企業の研究機関を開放することで、中学生や高校生が研究を深め、起業してみようといった大胆な話になっていけば、企業としても、連携先が増え、起業家が増えますので、浜松にとってプラスになるのではないかと思います。

（鈴木市長）

例えばトップガン教育でも、本当に能力が突出した子がいたら、大学の研究室を開放して研究を深めることができれば良いと思います。

（渥美委員）

制度として、仕組みとして教育はどうあるべきかという観点からすると、企業の協力を得るには、企業側にもメリットがないと協力を得られないと思います。個人の才能を伸ばしてバックアップする方法論として、企業に協力をお願いするには、浜松の会社であるという共通項から、必ずしも自分の会社に返ってこなくても何割かは返ってくるだろうという期待を持っていただかないと、協力は得られないだろうと思います。やはりある程度企業のバックアップというものをお願いしやすく、企業もそれに受け答えやすいような仕組みでないと、1 つの発想だけで終わってしまうのではないかと思います。

それから、浜松にとどまらず日本、世界に突き抜けて頑張ってもらうレベルの子は、確かに何か方策を考えないと、教育の根本であるその子らしい人生や能力を発揮する機会が与えられないことにもなりかねません。能力を埋もれさせてしまう、抑えてしまうということは、教育本来の姿ではないだろうと思います。

問題は、どのような仕組みにしたら良いのだろうかということであり、案外社会人になったらあまり伸びない子もいますから、そこの見分け方が難しいと思います。

（花井教育長）

渥美委員から、どういった仕組みにしたら良いかというお話が出てきましたけれども、時間も迫って来まして、いろいろご意見もいただいております。最後に全体を通しまして、子どもの才能を伸ばす取り組みを推進するために、今後どのようなことに重点的に取り組む必要があるとお考えになるか、少しその意見をいただいて、締めに入っていきたいと思います。

（渥美委員）

私は教育というのは、指導者がいなくては成り立たないものだと思っています。指導者がどのような力をつけているかが非常に大事だと思います。教育の中身と、もっと広い人間としての器と言いますか、これは永遠の課題ではありますけれども、教職は一生取り組むべき価値のある職業だと思いますし、そういった性質のものだと思っております。

私は教職員に折に触れて、あなたにとって教育とは何ですかとお聞きしていますが、この問いに対して瞬間的に答えてほしいと思っています。それが年月を経て違ってくることもあるでしょうし、恐らく答えも 1 つではないと思いますが、少なくとも私の考える教育はこうですということを、24 時間考えて取り組んでもらいたいです。

教育というものは、社会をつくり、まちをつくり、そして国をつくる根幹ですから、教職員に非常に期待をしています。そしてそのために教職員が何を望み、どうすればその能力を発揮してくださるのか、あるいは能力を身に付けてくださるのかということを第一に考えていくには、まず教育委員会が変わり、希望や生きがいを持って働けるような環境を整えていくことが必要だろうと思います。こういった協議の場を十分に活かして、市長と共に歩んでいけたらと思います。

（安田委員）

私が先ほど話をした免外（他の教科の教員が県教育委員会に免許外教科担任を申請し許可を受けて授業を行うこと）の話で、例えば家庭科の教員が技術の免許を取りたいと思っても、費用の面や時間の面でハードルが高く、難しい現実があります。人材を有効に活用するということを考えるのならば、学校の業務から外して集中的に勉強する時間を設けてあげる配慮も必要なのではないかと思います。

それから、理科の教員が免外の数学を担当する場面等で、テストで点を取るために問題集ばかりに取り組んで、数学の楽しさや面白さを伝えることができていないということがあります。免許の取得に意欲のある教員に学びを深めるチャンスを与え、浜松全体の子どもの手厚い指導ができるような形ができれば良いと思います。

（石田委員）

今日の会議に当たって、教育学者が子どもの才能について論じた本を何冊か読んだのですが、その中の中高生へのアンケート結果で、学校で何をしたいか、何を望むかという設問への回答で 1 番多かったものが、友達との関係の中で社会性を育てていきたい、2 番目が先生から生き方を学びたい、3 番目が自分の才能を見つけ出してそれを伸ばしたい、というものでした。

教職員は日々忙しいかもしれませんが、子どもの希望を常に頭に入れて、子どもと接することが一番だと思います。

（花井教育長）

今日は子どもの才能を伸ばすということで、市長といろいろな観点からお話ができ、いろいろなアイデアもいただけたと思っています。

締めということになりますが、市長から感想を含めてお願いします。

（鈴木市長）

「才能」と一言で言ってもいろいろな才能がありますし、私は義務教育の最大の使命は、子どものいろいろな能力を底上げすることにあると思っています。一人ひとりの才能や能力を伸ばしていく際に、義務教育の中では難しい場面が出てくるかと思いますので、義務教育外でいろいろな機会を用意していくということになるのではないかと思います。そういった機会を充実させることで、自分の才能や能力に気付いたり、それらを伸ばしたりすることができるのではないかと思っています。ぜひまた皆様にも、今後も具体的なご意見をいただきたいと思います。

(3)次回の協議事項について

（花井教育長）

それでは、協議事項の（3）に移りたいと思います。次回の協議事項は、第 1 回目の総合教育会議でもお示しをいたしましたとおり、「コミュニティ･スクールの推進」についてでございます。

論点や協議のポイントとしたい事項、有識者の意見を聞きたい点や有識者の候補等について、ご意見、ご提案等がございましたら承りたいと思いますが、いかがでしょうか。有識者を呼ぶ、呼ばないを含めて、もし呼ぶとしたらということで、固有名詞でも結構ですし、こんな感じの話が聞きたいということをいただければ、事務局ともども考えていきたいと思います。会議の進め方についてもいろいろなご意見をいただく中で、協議が深まればありがたいと思っております。

（鈴木市長）

文部科学大臣補佐官の鈴木寛さんは、昔からコミュニティ･スクールに非常に関心を持っていらして、政府の中では第一人者で、アクティブ･ラーニングの生みの親でもいらっしゃいます。貴重なお話を伺うことができるのではないでしょうか。

（花井教育長）

日程の調整もあるかと思いますが、確認をさせていただきたいと思います。ほかに教育委員の皆様から何かございますか。よろしいですか。あればまた後でご意見は承りたいと思います。それでは、事務局にお返しをしたいと思います。

5　開　会

（事務局：企画調整部次長　松永）

長時間にわたって議論をしていただきまして、ありがとうございました。

以上をもちまして、第 2 回総合教育会議を閉会いたします。